お客様各位

元気通信

過剰報道・・・不安を煽ってなんになる？

こんにちは、サーマルタンクの新洋技研工業です！

唐突ですが、今の状況をどのように感じられているでしょうか？

連日のように派遣の打ち切りや業績悪化といった報道がされています。

確かに本当に大変な業界はありますが、まるで全ての業界が大変な状況に陥っているかのような雰囲気にしてしまうような報道のあり方に対し、不信感を持ちます。

これでは比較的順調な業界、会社があったとしてもそれを表明することが悪いような気にさせられてしまいかねないのではないでしょうか？

事件の報道にしてもそうです。マスコミが取り上げることによって連鎖的に同じような事件を誘発してしまっているのではないか？と思われている視聴者も決して少なくはないと思います。

報道は事実を知らせる義務があると言われますが、確かに過度な報道規制は言論の自由に反することになるかもしれません。しかしそれを錦の御旗のように掲げてスクープになれば何でも良いというやり方や報道する側の「思想の押し付け」とも取れる番組がないかと言えば決してそうではないと思います。

危機意識を持たせることと不安を煽ることは全く性質が異なります。

報道はこのような時だからこそ人々の不安を煽るような過剰とも思える報道は自粛し、例えば力強く業績を維持もしくは伸ばしている企業に焦点をあて、決して今の状況が全て悪いだけではない、変化の中にこそ機会がある、ということを知らせて欲しいと思っています。

えー？えらそーなこと言ってるが、それじゃあキミんところの会社はどーなの？・・・・・・・・

はい！今年もひたすらあの手この手で頑張ってま～す！

日本の野鳥シリーズ

時にはトキを観に

技術営業部　佐藤　弘

日本語で充分事足りるのにやたら外国語を持ち出す趣味はないが、朱鷺色は pinkish orange としか言いようがなく、「桃色がかった橙色」ではあの華やかな色合いに結びつかない。だが悲しいかな、その美しさ故に乱獲されたのも国内絶滅の一因という。

10 羽のトキが試験放鳥されて 2 ヶ月余り、秋の渡り調査打上げにグループ 7 人で 08 年 12 月初頭の佐渡を訪ねた。狙いは航路及び加茂湖の水鳥とトキを遠望する事だが、幹事役を言い渡された私は花より団子、地酒と旬の魚介への期待に浮かれていた。

平日の昼間にも関わらず、本編「ハヤブサ」のK氏が案内に立ってくれた。開口一番、サファリの様に「突然至近で遭遇したら車から出ないように」と彼は言う。何故か車内のヒトには無警戒だが外に出たら…鳥キチ熟知の事をあえて念押しする程、トキをいたわり脅かさない様に気遣うK氏の思いが伝わる。

行った先には、ボランティア観察員と田んぼで餌を採る番いがいた。私達は一段低い所から首を伸ばして双眼鏡と望遠鏡で定点観察。その距離は見つけた時は 200m、テキが最も近寄った所で 120m くらいか。これだけ距離があれば、一応警戒は怠らなくても落ちついて自由に振舞うとK氏は話す。

餌は原則与えず、ジョギングや農作業をする人を何ら制約しない、これ迄と何も変わらない環境で野生化を図るらしい。鳥側に適応なり順応なりを促がす必然の選択だろう。迷惑なのはカメラを構えて無神経にトキに近づく人だ。現に何日も現場に張り付いてトキに迫る撮影行動を観察員が注意したら、食ってかかって来たという他県の男がいた。自分のしている事が分かっていない。だが意外なのは一帯が銃猟区のままという事だ。銃声や放たれた猟犬にまでトキに順応を求めるのは、どこかおかしい。

今回はトキの他に、大陸から来て居ついているコウノトリまで観て全員大満足。かつて 07 年 5 月連休に「にいがた野鳥の会」の 42 人が訪れた探鳥会では、航路と島内 4 地点で 74 種もの野鳥が出現した。いつ訪ねても佐渡は鳥と食の宝庫だ。

この先、佐渡の自然の中で生まれた足環のないトキを観たら、その時点で私の観察リストは久々に 1 種増える。しかし野生の世界は厳しい。私達に元気な姿を見せた 10 日後、識別番号 15 の雌は足を怪我したところをタヌキに襲われたらしい。

酒蔵さんとの長ーいおつきあい

第 20 話

取締役会長　大辻　英郎

第１９話で NHK 大河ドラマ天地人の史跡、山形県米沢市を訪ねた時の拙文を記載したが、越後高田の春日山城跡と林泉寺をその後訪れてみた。上越市と海が広々と見えしばし兼続、謙信の心を偲んでみたが、平和呆けの世に生きる小生には戦国時代の武将の世を見通す力など有るわけがない。秀吉の命をうけ、上杉は会津に国代えとなり越後をはなれることになったという。それまでの史跡はいっぱいあるのであちらこちらと訪ねてみたい。

先をみる力はどう身に付けられるのか、テレビ・新聞・コメンテーターなどのいうことなど、大衆に迎合することばかりで役に立つ訳がない。やはり原点にもどり何を自分はしたかったのか、本質は何なのか、自分の心に聞いてみることにしよう。

３３年前会社を興したとき社是を作った。

「誠実・研鑽・克己」自分が立派なことを言いながら今どうなの？

本当にむずかしい。
お客様が使いやすい装置、
良いお酒を醸されるのに役立っているだろうか？
如何でしょうか。

次号へつづく

戦略をつくる７つのカギ

1. 自らを知る
2. 本当の強みを見つける
3. 捨てる勇気を持つ、やらないことを決める
4. ナンバーワンになっている姿を描く
5. 強みを機会にぶつける
6. 機会に集中動員する
7. 小さな成功体験を習慣化する

ダイヤモンド社　「戦略をつくる力」　タナベ経営　若松　孝彦　著より抜粋

エッセイ

町屋の人形さま巡り　新潟県村上市

生産資材主任　島貫　修一

戸を開けて店内に入り「こんにちは、人形を見せてください」。「いらっしゃいませ、どうぞこちらでご覧ください」と、にこやかに迎えてくれる。店先や座敷には雛人形に五月人形に七福神から、陶製の人形や抱き人形が並べてある。古い物は享保年間の頃というから、テレビでお馴染みの「暴れん坊将軍徳川吉宗」の時代で、300 年も前に作られた物だ。

そして享保から文化文政・幕末そして現代と時代を下るに従って、雛人形が変わってきていることも見て取れる。享保の雛人形には五人囃子はあっても三人官女は無いし、江戸時代のお雛様は冠を被っている。お内裏様は向かって右側に置かれていたのに、近代になってからヨーロッパ式に左側になったそうだ。雛人形の表情も瓜実顔から現代風な顔立ちに変化しているが、庶民向けに作られた安価な陶製の古い雛人形は、顔も庶民そのものでこれもおもしろい。

でも最も壮観だったのは土間の天井からぶら下がった数百匹の塩引き鮭と雛人形のコラボで、照明に照らされ華やかで幸せに満ちた雛人形と、塩引きにされたかわいそうな鮭の険しい表情の対比が印象的。3 月初旬の雪の舞う寒い日に 4 時間かけて 30 件ほど歩き回ったが、お茶や甘酒や味噌汁や和菓子で温かくもてなしてもらえた。次は 9 月の「町屋の屏風まつり」を見に行きたい。